

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.2〉

〈厚南② 課題とキーマン〉

厚南地区の大部分は開作による低地で、厚東川の水位よりも低い。堤防を越すほどの水害が起きれば住宅が浸水し、大惨事となる。1942年8月27日の周防灘台風では、満潮時の高潮で厚東川の堤防が決壊。海水がなだれ込み、地区内だけで死者、行方不明者合わせて200人余りにもなった。

大風水害の教訓、未来に生かす



中野方面に避難した罹災(りさい)者への炊き出し(提供)

氾濫危険箇所マップ作りに力

当時11歳だった厚南郷土史研究会の大窪静美会長(中野)は「台風の際、自宅の窓を開けて周囲を見渡すと辺り一面が水浸し。御撫育用水の堤防が海に浮かんでいた」と振り返る。

住民有志で構成する地区自主防災会(新城寛徳会長)は、住民の逃げ遅れを防ぐため、2021年から内水氾濫危険箇所のマップ作りに取り組んでいる。自主防災会と各自治会が協働で現地調査し、下水道や水路の排水能力を超える豪雨による

内水氾濫で想定されるリスクを示している。災害時のリスクを電子地図に落とし込んで避難に役立つ情報を可視化するのが狙い。マップには多様な情報を重ねられる地理情報システム(GIS)を使用。モデルケースとして中野、鍋倉の両自治会のメンバーがまち歩きを行い、宇部鴻城高の生徒や県立大の学生にも協力を仰いで危険箇所をチェックした。

今年2月には「まち歩き」の振り返りワークショップを開催。見つけた46カ所の危険箇所を確認してデータに落とし込み、県立大の倉田研治准教授らが両自治会のマップを作成した。今後はスマートフォンなどで避難に関する情報を簡単に見られるようにデータ化する。最終的には地区全体に広げる方針。地区自治会連合会の三戸和寿会長は、いざというときの逃げ遅れを防ぐため、マップの完成だけでなく、常日頃から地域ぐるみで防災を意識する必要があると強調。「家族だけでなく近隣の人の動向にも関心をもち、気軽にあいさつを交わして支援が必要な人の情報を把握しておくことも大切。それが地域の絆を育む」と語る。